

剣道における男子大学生の競技力に関する研究 —全日本学生剣道優勝大会における上位チームの選手構成に見る個々の競技実績が結果に与える影響及び関連性についての研究—

櫻井美子 岡田守正 新里知佳野 藤本太陽 古澤伸晃 八木沢誠

要旨

本稿は昨年度行った女子大学生の競技力に関する研究を継続し、女子と同様の調査方法を用いた場合、男子はどのような結果を示すのかを調査するとともに、男女での共通点や相違点を検証、考察する。

キーワード 男子大学生 競技力 運動量 生活環境 学年比

1、男子大学生の活躍

近年、男子大学生の各種大会での活躍が目立っている。表1は平成18年から28年に全日本剣道選手権大会^{注1)}に出場した学生数と入賞者である。全日本剣道選手権大会は男子剣道界において競技力を競う場としては最高峰とされる大会であり、各都道府県大会の予選を勝ち抜き本戦に出場できる。第32回(1984年)大会から出場資格が六段以上に制限されたが、第38回(1990年)から五段以上に、第43回(1995年)には段位制限が撤廃され20歳以上に改められている。上記の出場資格を満たしていれば誰でも出場することができる。

表1の学生出場数をみてわかるように男子大学生が本戦に出場することは極めて困難である。理由としてあげられるのは、大学生の本分は学業であり剣道やトレーニングの時間が限られている。近年、出場者の職業としては警察官が最も多く、術科特別訓練員(以下、特練)に選抜され剣道を中心に活動していることから、剣道に充てる時間が比較にならない。また、平成18年から平成27年の優勝年齢の平均は29.7歳であり、技の成熟さや経験も必要といえる。このようなことから、全日本剣道選手権大会で大学生が好成績を収めることは難しい。しかし、平

成26年第62回全日本剣道選手権大会で竹ノ内佑也選手(当時筑波大学3年生)が史上最年少、43年ぶりとなる学生での日本一に輝き、その後連続して学生が入賞している。平成27年第16回世界剣道選手権大会^{注2)}(以下16 t h w k c)では、3名の大学生が選手として出場した。これまで女子大学生が選出されることはあったが男子では初めての快挙である(表2)。

現在、全日本剣道連盟は2つの方法で選手育成をしている。

- 1、全日本剣道連盟強化選手(以下、強化)、年齢制限は特に設けられていない。
- 2、選抜特別訓練講習会(以下、骨太)、原則25歳以下で、一定期間継続的に指定する(約2年間)。

【目的】

- ・強化 16 t h w k c 出場の代表候補選手を強化すること。
- ・骨太 全国から青年層の中核となる剣士を選抜し、剣道水準の向上をはかるための特別訓練を実施する。長期的展望に基づき我が国の基幹となる剣士、および日本を代表する選手を育成する目的を持って行われる。

現在、強化に選出されている学生数は(2017.1.6現在)男子33名中8名、骨太は58名中10名である。16 t h w k c に出場した大学

表1 全日本剣道選手権大会学生出場数と学生入賞者

回	年	学生出場数(名)	大会出場数(名)	学生入賞者	大学名	学年	県	大会成績
第54回	平成18年	0	64					
第55回	平成19年	0	64					
第56回	平成20年	1	64					
第57回	平成21年	0	64					
第58回	平成22年	1	64					
第59回	平成23年	2	64					
第60回	平成24年	1	64					
第61回	平成25年	0	64					
第62回	平成26年	2	64	竹ノ内佑也	筑波大学	3	福岡	優勝
第63回	平成27年	3	64	梅ヶ谷翔	中央大学	2	福岡	3位
第64回	平成28年	2	64	宮本敬太	国士舘大学	3	茨城	3位

(全日本剣道選手権大会プログラムより抜粋)

表2 第16回世界剣道選手権大会出場者と成績

氏名	職業	出場枠	大会成績
内村良一	警察官	団体戦	優勝
網代忠勝	警察官	個人戦	優勝
正代正博	警察官	団体戦	優勝
升田 良	警察官	団体戦	優勝
勝見洋介	警察官	団体戦	優勝
西村英久	警察官	個人戦	3位
安藤 翔	警察官	団体戦	優勝
竹ノ内佑也	筑波大学 4年生	団体戦 個人戦	優勝 2位
村瀬 諒	日本体育大学 4年生	個人戦	ベスト8
山田凌平	明治大学 1年生	団体戦	優勝

(剣道日本・剣道時代 世界大会特集より抜粋)

生以外の7選手は全員大学を卒業しており、大学で過ごす4年間は今後の剣道界を担っていく存在を育成しているといっても過言ではない。

2、研究の目的と女子の調査結果

本研究は昨年度女子を対象に行った研究の継続的な内容である。これまで大学生の競技力に関する研究はほとんどなく、各種大会で上位に進出している選手は高校時も高い競技実績を有しているという印象のみであった。また、上位校の特徴や共通点、強化の方法論に関して明確なものがない。そこで、全日本女子学生剣道優勝大会^{注3)}に焦点をあて、大会結果をもとに①大学の最高峰で試合した選手は高校時にどのような成績を残した選手なのか②個々の競技成績が結果に与える影響や関連性はあるのか、について調査し分析した。

女子の研究結果は以下の通りである。

①女子大学の最高峰である全日本女子学生剣道優勝大会の決勝戦で試合をした5名の選手は高校時にも高い競技実績を有していた。

②個々の競技実績が大学時の大会結果に与える影響は大きく、高校時の競技実績との関連性は明らかとなった。

平成17年から26年までの10年間、全日本女子学生剣道優勝大会の決勝戦に出場した20大学の中で、高校時に競技成績を有さない選手のみで構成された大学は1大学（平成19年日本体育大学）であった。また、1名のみが競技成績を有する大学は東海大学（平成17年）、日本体育大学（平成21年）、龍谷大学（平成22年）の3大学である。他の16大学は2名以上の選手が高校時に入賞した経験を有する結果となった。結論としては高校時に競技成績を持たない選手構成の大学が全日本女子学生大会で上位に進出することは難しいことが明らかとなったが、高校時の競技実績をポイント化し集計した結果、競技実績が低い大学からひとつの共通点が見受けられた。（表3）それは体育学部を有するということだ。各大学は寮を完備し活動環境が整っている。大学近隣で生活しているため、通学時間が短く朝夕の稽古やトレーニングの時間が確保されている。また、授業の中で身体を動かす機会も多い。食事に関して、東海大学は自炊だが日本体育大学は学生寮であることから栄養面でのサポートも充実している。

上述したように高校時に競技実績を有する選手が少ない大学でも環境次第では結果を残す可能性があるといえる。女子は上記の研究結果と

表3 女子の競技実績ポイント順

順	大学名	年	結果	ポイント数	順	大学名	年	結果	ポイント数
1	法政大学	平成26年	優勝	44	11	大阪教育大学	平成25年	準優勝	14
2	筑波大学	平成24年	準優勝	28	12	清和大学	平成17年	優勝	11
3	筑波大学	平成23年	優勝	27	12	龍谷大学	平成22年	準優勝	11
4	筑波大学	平成26年	準優勝	26	12	東海大学	平成23年	準優勝	11
5	筑波大学	平成20年	優勝	24	15	国土舘大学	平成25年	優勝	10
6	筑波大学	平成21年	優勝	24	16	法政大学	平成18年	準優勝	8
7	筑波大学	平成19年	準優勝	19	16	法政大学	平成20年	準優勝	8
8	早稲田大学	平成22年	優勝	17	18	東海大学	平成17年	準優勝	3
8	鹿屋体育大学	平成24年	優勝	17	18	日本体育大学	平成21年	準優勝	3
10	埼玉大学	平成18年	優勝	14	20	日本体育大学	平成19年	優勝	0

神奈川大学国際経営論集第51号

なったが、男子も同様の研究方法を用いた場合、どのような結果になるのだろうか。

今回の研究では

①高校時の大会成績

②個々の競技成績が結果に与える影響や関連性

③男女での共通点や相違点の検証

以上を調査し分析、考察する。

3、方法と調査対象

(1) 平成18年から平成27年までの10年間、全日本学生剣道優勝大会^{注4)}で決勝戦に進出した20大学とし、決勝戦に出場した1チーム7名の選手とする。個々の高校での競技実績をポイント化(以下、Pt)し集計する。対象選手は決勝戦に出場した1チーム7名、全20大学の140名とする。

(2) 剣道時代^{注5)}、剣道日本^{注6)}に記載されている新人データバンク^{注7)}、各種大会での試合結果をもとに調査する。大学名、個人名については書籍に記載されている記録をもとに表記する。

(3) 競技実績の対象となる大会

①全国高校総合体育大会団体戦

②全国高校総合体育大会個人戦

③全国高校選抜大会

④国民体育大会

(4) Ptは優勝、準優勝、3位とする

(5) 各大会のPt

①・③・④

団体戦 優勝3Pt 準優勝2Pt 3位1Pt

②

個人戦 優勝5Pt 準優勝4Pt 3位3Pt

・Ptの差異について

個人戦と団体戦のPtの差異については、団体戦は補欠を入れると7名で勝ち上がる総合力に対して、個人戦は個人ひとりで勝ち上がるという点から2Ptの差をつけた。

4、結果

4.1 決勝進出大学名とPt結果

表4は決勝戦進出大学と合計Ptの結果である。男子は決勝戦に進出したすべての大学で高校時に入賞経験を有している選手がひとり是在籍していることが明らかとなった。

優勝した大学で1番Ptが高いのは平成25年の筑波大学、1番低いのは平成18年の日本大学である。準優勝大学で1番Ptが高いのは平成20年の筑波大学、1番低いのは平成19年の大阪体育大学である。優勝大学の平均Ptは20.8Pt、準優勝大学の平均Ptは16.7Ptであることから優勝と準優勝にそれほど大きな差は見受けられないことが示された。

30Pt以上の大学は国土舘大学、筑波大学、鹿屋体育大学の3大学となった。平成19年、20

表4 決勝戦進出大学とポイント結果

年度	成績	大学名	合計ポイント	ポイント保有者数
平成18年度	優勝	日本大学	4	2
	準優勝	鹿屋体育大学	14	4
平成19年度	優勝	国土館大学	30	5
	準優勝	大阪体育大学	1	1
平成20年度	優勝	国土館大学	32	5
	準優勝	筑波大学	26	6
平成21年度	優勝	鹿屋体育大学	23	5
	準優勝	大阪体育大学	11	4
平成22年度	優勝	早稲田大学	17	4
	準優勝	日本体育大学	8	2
平成23年度	優勝	筑波大学	15	3
	準優勝	中央大学	24	6
平成24年度	優勝	国土館大学	10	3
	準優勝	中央大学	21	6
平成25年度	優勝	筑波大学	34	6
	準優勝	法政大学	18	6
平成26年度	優勝	鹿屋体育大学	17	4
	準優勝	国土館大学	25	4
平成27年度	優勝	筑波大学	26	5
	準優勝	鹿屋体育大学	19	6

(ポイント集計結果をもとに作成)

年と2連覇を果たした国土館大学は全国高校総合大会個人戦の入賞者を数多く起用している。7名中優勝が2名（同選手）、3位が2名（平成19年と20年は別選手）である。1番Ptの高い平成25年筑波大学は全国高校総合体育大会個人戦入賞者が1名（3位）のみだが団体戦各種大会で優勝経験を有する選手が6名在籍している。調査の結果、全日本学生剣道優勝大会の決勝戦に進出している大学は高校時にも高い競技実績を有していた。男女での相違点は、女子は20大学中競技実績を有さない大学（0Pt）が1大学あったのに対し、男子はすべての大学が競技実績を有していた。また、女子は5名全員が入賞経験を有する大学が4大学あるのに対し、男子の場合7名全員が競技実績を有している大学はひとつもなかった。

下記は決勝戦に進出した7名の選手の高校時の競技実績である。

【平成18年】

優勝	日本大学	団体戦	2位2回		
準優勝	鹿屋体育大学	団体戦	優勝1回	2位1回	3位3回
		個人戦	3位2回		

【平成19年】

優勝	国士舘大学	団体戦	優勝3回	2位1回	3位3回
		個人戦	優勝2回	3位2回	
準優勝	大阪体育大学	団体戦	3位1回		

【平成20年】

優勝	国士舘大学	団体戦	優勝3回	2位3回	3位1回
		個人戦	優勝2回	3位2回	
準優勝	筑波大学	団体戦	優勝2回	2位4回	3位6回
		個人戦	3位2回		

【平成21年】

優勝	鹿屋体育大学	団体戦	優勝3回	2位3回	3位3回
		個人戦	優勝1回		
準優勝	大阪体育大学	団体戦	優勝3回	3位2回	

【平成22年】

優勝	早稲田大学	団体戦	優勝2回	2位1回	3位4回
		個人戦	2位1回		
準優勝	日本体育大学	団体戦	優勝2回	2位1回	

【平成23年】

優勝	筑波大学	団体戦	2位5回	3位2回	
		個人戦	3位1回		
準優勝	中央大学	団体戦	優勝2回	2位1回	3位7回
		個人戦	優勝1回	2位1回	

【平成24年】

優勝	国士舘大学	団体戦	2位1回	3位2回	
		個人戦	3位2回		
準優勝	中央大学	団体戦	優勝2回	2位1回	3位3回
		個人戦	2位1回	3位1回	

【平成25年】

優勝	筑波大学	団体戦	優勝6回	2位4回	3位5回
		個人戦	3位1回		
準優勝	法政大学	団体戦	優勝1回	2位2回	3位6回
		個人戦	優勝1回		

【平成26年】

優勝	鹿屋体育大学	団体戦	優勝3回	2位4回	
準優勝	国士舘大学	団体戦	優勝1回	2位2回	3位3回
		個人戦	優勝2回	3位1回	

【平成27年】

優勝	筑波大学	団体戦	優勝3回	2位2回	3位5回
		個人戦	優勝1回	3位1回	
準優勝	鹿屋体育大学	団体戦	優勝3回	2位4回	3位2回

表5 決勝戦進出回数と内訳

大学名	優勝/回	準優勝/回	決勝進出/回
国士舘大学	3	1	4
筑波大学	3	1	4
鹿屋体育大学	2	2	4
大阪体育大学		2	2
中央大学		2	2
早稲田大学	1		1
日大大学	1		1
日本体育大学		1	1
法政大学		1	1

(大会結果をもとに作成)

4.2 決勝戦進出回数と内訳

国士舘大学、筑波大学、鹿屋体育大学は4回決勝戦に進出しており、3大学は過去10年間で決勝戦に進出した大学の6割を占めている。女子は1回のみ決勝戦に進出した大学が7大学、男子は4大学だったため、女子よりも男子は同じ大学が複数回、決勝戦に進出していることがわかる。

5、考察と分析

5.1 決勝戦における勝利ケースの分析

Ptの高い大学が勝利したケースは10回中6回、Ptの低い大学勝利したケースは4回となった。

Ptの高い大学が勝利したケース

- ①平成19年 国士舘大学 30－1 大阪体育大学
- ②平成20年 国士舘大学 32－26 筑波大学
- ③平成21年 鹿屋体育大学 23－11 大阪体育大学
- ④平成22年 早稲田大学 17－8 日本体育大学
- ⑤平成25年 筑波大学 34－8 法政大学
- ⑥平成27年 筑波大学 26－19 鹿屋体育大学

Ptの低い大学が勝利したケース

- ①平成18年 日本大学 4－14 鹿屋体育大学

②平成23年 筑波大学 15－24 中央大学

③平成24年 国士舘大学 10－21 中央大学

④平成26年 鹿屋体育大学 17－25 国士舘大学

Ptの高い大学が勝利したケースは、平成22年早稲田大学以外すべての大学において平均Ptを上回る結果となった。20大学を競技実績順に並べた場合、1位、平成25年筑波大学(34Pt)、2位、平成20年国士舘大学(32Pt)、3位、平成19年国士舘大学(30Pt)、4位、平成27年筑波大学(26Pt)、8位、平成21年鹿屋体育大学(23Pt)といずれも上位である。平成22年の早稲田大学対日本体育大学は共に平均Ptに達していない大学同士での決勝戦となった。

次にPtの低い大学が勝利したケースは、4大学すべての大学で優勝の平均Ptを下回る結果となった。また、平成18年の日本大学対鹿屋体育大学は平成22年の早稲田大学対日本体育大学と同様、平均Ptに達成していない大学同士の決勝戦である。20大学を競技実績順にした場合、13位、平成26年鹿屋体育大学(17Pt)、14位、平成23年筑波大学(15Pt)、第17位国士舘大学(10Pt)、第19位、平成18年日本大学(4Pt)となる。

優勝した大学はPt合計数が高い大学と、低い大学にわかれる結果となった。

5.2 優勝・準優勝の分析

個々の競技実績を調査した結果、すべての大学において高校時に入賞経験を有する選手が在籍していることが明らかとなった。昨年の女子を含めて考えると過去10年間の全日本学生大会で競技実績を有さない大学が決勝戦に進出したのは40大学中（10年間の男女合計）1大学だけとなる。このことからわかるように、高校時の競技実績は大学時の競技実績に大きく影響している。

次に決勝戦に進出した大学はすべてスポーツ推薦制度を導入している。女子の上位大学の分析でも述べたが、男子も同様のことがいえる。決勝戦に進出した9大学はスポーツ推薦制度の方法や学費等の免除は各大学で様々であると考えられるが、スポーツ推薦制度を活用し高校時に高い競技実績を有する選手を獲得している。男女の調査結果からもわかるように高校時に高い競技実績を有する選手を獲得し周りの選手を触発させながら切磋琢磨できる環境がなければ、競技実績のない選手構成で上位に進出することは極めて難しいと言わざるを得ない結果となった。

5.3 選手構成と学年比

今回の研究で最も注目すべき点となったのが選手構成である。学年合計数とは7名の学年を足したものであり、大学は4学年で構成されていることから最大で28Ptとなる。4年生のみで構成された大学は女子と同様1大学もなかったが、上級生のみ（3、4年）で構成された大学は4大学であった。女子は1大学のみとなり、男子は女子より上級生で構成している大学が多いといえる。

学年構成が高い大学

(学年合計数27Pt)

・国土舘大学（平成24年） 4年生6名 3年生1名

(学年合計数26Pt)

・大阪体育大学（平成19年） 4年生5名 3年

生2名

(学年合計数25Pt)

・日本大学（平成18年） 4年生4名 3年生3名

・鹿屋体育大学（平成18年） 4年生5名 3年生1名 2年生1名

(学年合計数24Pt)

・大阪体育大学（平成21年） 4年生5名 3年生1名 1年生1名

・中央大学（平成24年） 4年生4名 3年生2名 2年生1名

・鹿屋体育大学（平成21年） 4年生3名 3年生4名

* 下線は3,4年生の上級生で構成されている4大学。

表6は学年合計数の高い順に示したものである。大学名の右側には競技実績合計Pt数の順位（合計数が高い大学が1位）を示している。学年合計が1番高かったのは国土舘大学（平成24年）である。4年生を6名起用しており、全体でみても6名起用しているのは国土舘大学だけである。次に大阪体育大学（平成19年）4年生5名3年生2名である。平成19年の大阪体育大学は競技実績合計数が全体の中で1番低い20位（1Pt）である。学年合計数が25Ptとなった大学は平成19年に決勝戦を行った日本大学と鹿屋体育大学である。日本大学は4年生4名3年生3名と上級生のみでの構成となった。鹿屋体育大学は2年生を1名起用しているが4年生5名3年生を1名と高い学年構成となっている。競技実績のPt順は日本大学が19位（4pt）、鹿屋体育大学が15位（14Pt）である。

学年合計数が24Ptは3大学である。平成21年に決勝戦を行った鹿屋体育大学と大阪体育大学、もうひとつは中央大学（平成24年）である。鹿屋体育大学は4年生3名3年生4名と上級生のみでの構成しており競技実績は8位（23Pt）である。大阪体育大学は4年生5名3年生1名1年生1名である。平成19年の学年構成は上級生のみだったことから、起用された1年生は高校時に実績を有する選手かと考えられるが競技実績

表6 学年合計数と実績合計Pt順位（最大28Pt）

学年合計/ Pt	平成	大学名	競技実績順 /位	学年合計/ Pt	平成	大学名	競技実績順 /位
27	平成24	国士舘	17	22	平成20	国士舘	2
26	平成19	大阪体育	20	21	平成25	法政	11
25	平成18	日本	19	20	平成22	日本体育	18
	平成18	鹿屋体育	14		平成23	中央	7
24	平成21	大阪体育	16		平成27	筑波	4
	平成24	中央	9		平成19	国士舘	3
	平成21	鹿屋体育	8	19	平成26	鹿屋体育	13
23	平成22	早稲田	12	18	平成26	国士舘	6
22	平成23	筑波	15		平成25	筑波	1
	平成27	鹿屋体育	10	17	平成20	筑波	5

(集計結果をもとに作成)

はない。4年生より他学年の人数が多い大学は、平成23年中央大学が4年生2名3年生3名、平成26年国士舘大学が4年生1名3年生3名の3大学となった。

男子の選手構成と学年比は学年の合計が高い大学ほど競技実績が低く、学年の合計が低い大学ほど競技実績が高いことが明らかとなった。学年構成が1番高い国士舘大学（学年構成27Pt）は競技実績が17位、学年構成が2番目に高い大阪体育大学（学年構成26Pt）は20位、学年構成が3番目に高い日本大学、鹿屋体育大学（学年構成25Pt）は19位と14位、学年構成が5番目に高い大阪体育大学（24Pt）が16位である。逆に学年構成が1番低い筑波大学（学年構成17Pt）は競技実績が5位、2番目に低い国士舘大学、筑波大学（18Pt）は6位と1位、学年構成が19Ptの鹿屋体育大学は競技実績が13位ではあるが、次に低い中央大学、筑波大学、国士舘大学（学年構成20Pt）は競技実績が7位、4位、3位である。これは女子には見られない男子特有の結果であり、高校時に競技実績を有さなくても、強化の在り方や学生の取り組み次第で心技体の向上が十分に望めるということがいえる結果である。

5.4 Pt結果からみる上位大学の特徴

（1）部員数の多い大学が上位へ進出

表7は平成17年から26年までの部員登録数（大阪体育大学、鹿屋体育大学は平成20年度のみ）を平均したものである。どの大学も50名以上の部員数をかかえている現状から、厳しい予選会を通過しなければ選手として大会に出場することができないことや、剣道は階級制度がないため、毎日の稽古の中で様々なタイプの人間と剣を交え、対応する能力を高めることができる環境は必要不可欠な要因である。

表7部員登録数（n＝名）

大学名	過去10年平均部員登録数
国士舘大学	150.9
日本大学	55.1
早稲田大学	50.9
筑波大学	58.4
中央大学	68.4
法政大学	58.7
日本体育大学	106.9
大学名	平成20年度部員登録数
大阪体育大学	62
鹿屋体育大学	80

(関東学生連盟部員登録数より抜粋)

(2) 体育学部を有する大学

男子は20大学中15大学（女子は13大学）が体育学部を有する大学となった。女子の研究結果でも述べたがPtの低い大学の共通点として体育学部に所属していることがあげられる。保健体育の教員免許を取得できる制度があり、授業の中で体を動かすケースが一般大学より多い。男子も女子も体育学部を有する大学が上位に進出していることから、成長段階にある大学生は、部員全体で活動する時間以外も体を動かすことで競技力向上を助長させるひとつの要因であるといえる。

(3) 指導者の人数

国士舘大学、筑波大学、日本体育大学、大阪体育大学、鹿屋体育大学は体育学部を有していることから3名以上の専任教員が常に指導にあたっており複数の人間から指導を受けることができる。その他の大学も専任の教員や大学職員、師範、OBが数多く稽古に参加していることから、学生同士で行う稽古のみでなく、掛かる稽古の充実や技術指導の機会が多い。

森島健男先生の講演録を書籍化した「神の心 剣の心」に剣道上達の三要件として、いい師匠に就くことが第一だと述べている。『正師を得ざれば学ばざるにしかず』、良い先生に就かなければやらないほうがいいという意味だ。そのくらいいい師匠に就くということは剣道において重要なことを表わしている一文である。学

生が自主性を持って活動することは必要な事ではあるが、大人の知恵や経験を素直に取り入れ、その中で創意工夫をしながら技術向上を目指すことが、選手自身の実績の有無では測れない人間としての成長に繋がり、剣道の上達にも影響を与えていることは確かである。

5.5 学年比と競技実績からみる大阪体育大学の強さ

大阪体育大学が他大学と大きく違うのは学年構成が高く競技実績が低い点である。過去20年間で大阪体育大学が決勝戦に進出したのは3回である。表8は学年構成を示し、表9は高校時の競技実績を示している。平成15年はデータとして競技実績が残っていないため学年構成のみの表記とする。まず、学年構成については常に上級生を主体としたチーム構成である。平成15年、21年に1年生を1名起用しているが平成19年は上級生のためのチーム構成である。次に高校時の競技実績については、平成19年は3Pt、平成21年は11Ptといずれも低いPt数である。平成21年は平成19年に比べると高いPt数と言えるが、優勝経験をもつ選手は全員4年生で岡山県の高校を卒業しており高校3年時に行われた岡山県開催の国体メンバーである。その他の2Ptは国体優勝のメンバーである倉敷高校の勝岡選手が高校選抜で団体3位、大社高校（島根県）の吾郷選手が高校総体団体戦3位である。この11Ptは大阪体育大学の2大会のPt結果と比

表8 大阪体育大学の学年構成

年	結果	4年生/名	3年生/名	2年生/名	1年生/名	合計学年数/Pt
平成15	優勝	4	2	0	1	23
平成19	準優勝	5	2	0	0	26
平成21	準優勝	5	1	0	1	24

表9 大阪体育大学の高校時の競技実績

年	高校選抜	総体団体	総体個人	国体	競技実績/Pt
平成19年	なし	なし	なし	3位1回	3
平成21年	3位1回	3位1回	なし	優勝3回	11

(表8.9大会結果をもとに作成)

較すれば高いPt数と言えるが他大学と比較した場合は低い。

これまでの研究結果や分析をふまえ大阪体育大学の強みを考察すると、体育学部を有すること、寮が完備されており規則正しい生活が送れる環境があること、食事面のサポートが充実していることがあげられる。また、稽古の厳しさも外せない要因である。剣道日本が大阪体育大学の強さを特集した記事の中で、稽古の取り組みが明記されていた。ひとつ目は4年目で勝負できるような人材の育成である。実績のない選手でも4年生になればある程度戦えるようなところまで持っていく練習プログラムの重要性を示している。また、寒稽古という剣道の伝統的なイベントを利用しながら体を作ると同時に我慢強さや頑張る気持ちを育成し、それをベースとして次のステップに進める方法をとっているのだ。ふたつ目は大阪体育大学ならではの「立ち稽古」である。(以下引用)『この立ち稽古とは壁に向かって30cmほど離れたところで不動の姿勢で立つ「立禅」のようなもので、「動いてはいけない」という取り決めがあります。痒かろうか蚊が耳元を飛んでいようかモジモジしない。剣道に置き換えるなら、簡単に打っていったり、安易に守ったりせず、我慢強く自身の心をコントロールする、というあたりにつながることを狙っています』と総監督の神崎浩氏は述べている。稽古は午後約2時間、朝稽古は週に3日と特に特別なことをしている意識はないというが、レギュラーである上級生は寒稽古を何度も乗り越えることにより、厳しさが自信に変わったと考えられる。また、新たな試みにも挑戦している。それは、トレーニングと食事だ。学内の専門の先生に体づくりを目指したトレーニング法をプログラムしてもらい週に2、3回取り組んでいる。また、食事に関しては学校側に協力を得て寮ではなく週に何度か、学食で稽古後すぐに食事が摂れるシステムを導入したとのことであった。特集記事を分析すると「稽古に集中できる環境」「学生の取り組む姿勢と仲間の存在」「学生と指導者やOBの気持ちが連

結している」ことが勝利の要因としてあげられるのではないだろうか。まず、学生自身が稽古に集中できる環境は大学生にとって重要なことである。バランスの良い食事と十分な休息は運動選手にとって必要不可欠である。アルバイトに明け暮れていては疲れが溜まり気力を出すことができない。集中力も欠けてしまう。毎日ギリギリまで力を絞り出すためには充実した食事と睡眠時間の確保が必要である。そのための環境は簡単に準備できることではないがトップを目指す大学であれば必要な要素である。次に学生の取り組みである。これは上述した環境にも左右されるが学生自身が大学で取り組む目的や目標を明確にし、それに向かって進んでいく力と時にはサポートしながら共に歩いていく仲間の存在が大きい。厳しい稽古の臨むことは容易ではない。しかし、仲間が共に歯を食いしばり励まし合いながら稽古に取り組めば大きな力となる。そういう仲間に恵まれるか、という偶然性だけでなく、なれあいにならない人間関係をどう構築するのか、ということもマネジメントの一環であると考えられる。最後は学生と指導者（OB含む）との連結だ。これは信頼関係ともいえるが、どちらかが一方通行にならない関係性のことを示している。筆者も大学の剣道部を指導しているが、どうしても学生の思いと筆者の思いが連結しないことが多々ある。しかし、大阪体育大学の強みは、指導者側と学生側のそれぞれが尊重しながら、また、互いに思いを受け止めながら活動していることが見受けられる。それは指導者同士にもみられる点である。現在、大阪体育大学の総監督は神崎浩氏だが、監督は3年前に同大学に着任した村上雷多氏である。試合に関しては村上監督に一任しているということから、村上氏に全幅の信頼を寄せていると推察される。また、村上氏は現在26歳ということもあり、監督として自分で責任をもち学生と関わってほしいという願いもあるのではないだろうか。いずれにしても総監督を軸として監督や学生、そしてOBが協力しながら互いに尊重しながら活動が進んでいることは明確である。

参考までにだが、先日行われた（平成28年11月）全日本学生剣道優勝大会では13年ぶりとなる3度目の全日本学生大会の頂点に立った。4年生5名、3年生2名と上級生を主体にした学年構成で競技実績は高校総体団体戦で2位になった選手が1名のみと低い競技実績での優勝である。対戦は高校時に高い競技実績を有する中央大学である。（中央大学の高校時の実績：高校選抜優勝1回、2位2回、3位1回、高校総体団体戦優勝2回、高校総体個人戦2位1回、国体2位1回、7名中5名が入賞経験を有する）結果は3対2で大阪体育大学が優勝した。大阪体育大学は2Pt、中央大学は18Ptと今回研究の対象とした大学と比べても16Pt差の大学に勝利したケースはない。大阪体育大学を特別な大学と位置付けるのではなく、それぞれの大学や指導者が取り入れられることは何か、を考えることが結果を変えることができる手段のひとつである。

6、男女の比較

6.1 男女の共通点

（1）高校時に高い競技実績を有する選手が多い

男子：20大学すべてにおいて入賞経験者がいる

女子：1大学を除いて19大学に入賞経験者がいる

高校時に高い競技実績を有する選手が在籍しており、高校時に優勝を経験した選手が男子は20大学中16大学、女子は17大学である。4-2で述べたように40大学（過去10年男女）中39大学に入賞経験を有する選手が在籍していることから、男女とも高校時の競技実績が大学時の競技実績に大きく影響している。

（2）体育学部を有する大学

男子：15/20大学

女子：13/20大学

体育学部を有する大学の共通点に環境の良さがあげられる。決勝戦に進出した大学は男女と

も筑波大学、鹿屋体育大学、国土館大学、大阪体育大学、日本体育大学の5大学である。近隣に居住していることから朝稽古やトレーニング時間が確保できる。また、授業内でも保健体育の免許を取得できることから一般大学と比べて体を動かす機会が多い。次に専任教職員の人数が充実していることである。稽古面では掛かる稽古や技術指導の機会が多いのも気力を上げるためには欠かせない要素だ。生活面では寮生活を送っている大学が多いこともあり、アルバイトの管理や門限、消灯時間など規則正しい生活が送れる環境が整っている。学修面に関しては単位取得や授業への姿勢など教職員同士で情報共有や学生管理がしやすく学生の変化にも気付ける機会が多いだろう。食事面は5大学すべてではないが、稽古後に学食や寮で食事が準備されているため時間を空けずに摂ることができる環境は大学生には必要不可欠である。

上述したことは一般的に健康を維持するために必要な①栄養②睡眠③運動が生活の中でバランスよく保たれているということになる。成長段階にある大学生に欠かせない要素は何も特別な事ではないが、この環境を整えることや管理することはひとりではできず多くの人からの支援や理解がなければ成立しない。

（3）入学試験においてスポーツ推薦制度を実施

男女とも決勝戦に進出した大学すべてでスポーツ推薦制度を導入している。スポーツ推薦制度を活用し実績の高い選手にある程度の保証の中で大学を受験してもらうことは、今後も競技実績の高い選手を多く獲得するには欠かせない交渉手段である。

6.2 男女の相違点

（1）学年構成

男女の相違点は学年構成である。下記は学年構成についてデータ分析したものである。

分析方法は性別を独立変数、各学年を従属変数とし、 χ^2 検定を行った。データの解析には、

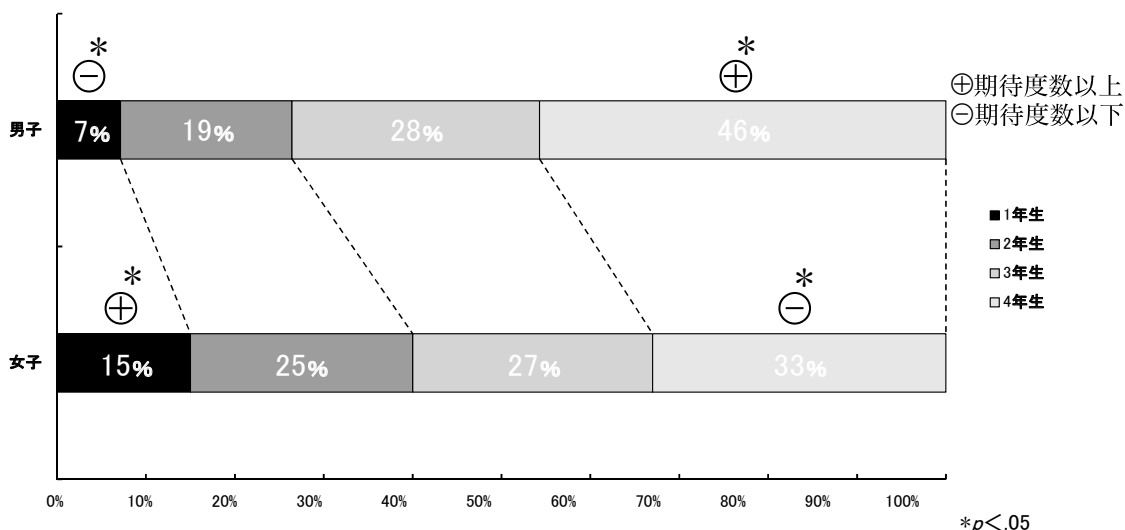


図1 決勝戦に進出した各学年における性別の出現率

(調査結果をもとに作成)

IBM SPSS Statistics 24を用いた。結果、図1は、決勝戦に進出した各学年における性別の出現率を示したものである。 χ^2 検定を行った結果、人数の偏りを示す傾向がみられた($\chi^2(3) = 6.69, p < 0.1$)。そこで残差分析を行った結果、1年生は男子より女子のほうが有意に多く、4年生では女子より男子のほうが有意に多いことが示された。

女子は男子より1年生をチームに入れることが多く、男子は女子より4年生をチームに入れることが多かった。

(2) 国立大学と私立大学

女子は競技実績の高い選手は国立大学に進む傾向があるが、男子はそうとはいえない。女子は優勝、準優勝に関係なくPt合計の高い大学から順番に並べたとき、1番目から11番目までにすべての国立大学が入る結果となった(国立大学の決勝戦進出は9回)。しかし男子は競技実績順に上位10大学を示した場合、1位筑波大学、2位国士舘大学、3位国士舘大学、4位筑波大学(平成20年、平成27年)、6位国士舘大学、7位中央大学、8位鹿屋体育大学、9位中央大学、10位鹿屋体育大学となった。5大学が国立大学、

5大学が私立大学である。過去10年間で全体でみた場合、若干国立大学が上位と考えられるが女子ほど傾向として強くはない。

7. 結論

Pt結果、考察、分析で明確になったことは、

- ①男子大学生の最高峰である全日本学生剣道優勝大会の決勝戦で試合をした7名の選手は高校時にも高い競技実績を有していた。
- ②個々の競技成績が結果に与える影響は大きく、高校時の競技実績との関連性は明らかとなった。
- ③男女での相違点はあまり見受けられず、男女とも大学で活躍している選手は高校時にも成績を残していた。しかし、男子においては女子よりも学年構成が高いことや、学年構成が高い大学ほど高校時の競技実績が低いことから大学入学後の活動次第では成績が大きく変わるといえる。

7.1 剣道競技の特殊性と男女の身体的要素

女子と同様、男子も高校時に高い競技実績を有している選手は大学時にも活躍していることが明らかとなったことから、やはり、低年齢期に会得した心技体や試合の経験はより頑強な崩

しがたいものだといえる。しかし、男子に見られた結果からは、上級生で構成された大学は競技実績が低い中でも全日本学生大会で上位に進出しているということだ。上級生になれば下級生に比べ稽古時間も経験も豊富になる。厳しい稽古に耐えた分、自信にも繋がる。男子はその要素が強く見られたが、女子は上級生を主体としたチーム構成ではなく上級生を軸として下級生をバランスよく起用する大学が多く見られた。男女とも稽古量やトレーニング量の確保、環境という点は同じだが学年構成に大きな差があったのが今回の研究で明確となった点である。

この結果は、男と女という性別の違いによる体力・運動能力の加齢に伴う変化の傾向によることはひとつの要因とっていいだろう。平成27年スポーツ庁が発表した体力・運動能力調査結果では、全体的な傾向として、6歳から加齢に伴い体力水準は向上し、男子は、17歳頃に、女子は14歳頃にピークに達するとし、男女とも20歳以降は加齢に伴い体力水準は緩やかに低下するとしている。このように男子と女子では体力や筋力の低下時期に差があるのだ。上述した内容は平均的な集計結果を示したものであるため、トップアスリートにはあてはまらない部分もあるが、男女ではじめから差があることは否めない。男子は上級生で構成された大学が高校時の競技実績が低くても全日本学生大会で結果を残しているのに対し、女子は異なる結果になったのは経験の豊富な上級生を軸とし、上級生に比べ体力や筋力が低下していない下級生を起用し、心と体と技術のバランスをとっているともいえる。また、女性アスリートのコンディショニングについても無視できないであろう。女性は月経があるため月経周期を考慮したコンディショニングは今後の課題点だ。男性指導者には理解できない生理的要素が女性にあることを考えれば、女性の指導者やコーチなどを配置すべきである。

このように男女での身体的特性に違いは科学的にも明確だが、注目したいのが一般的なピーク年齢である。男子は17歳、女子は14歳をピー

クに体力や筋力の低下が始まるとされているが、剣道の技術力を競う大会として最高峰に位置付けられている全日本剣道選手権大会の出場資格は20歳以上、全日本女子剣道選手権大会は18歳以上と定められている。これは体力や筋力のピーク年齢から考えれば大きくずれが生じている。全日本剣道選手権大会の優勝平均年齢（平成18年から平成27年）は29.7歳、全日本女子剣道選手権大会の優勝平均年齢28.7歳である。また、全日本女子剣道選手権大会で最多優勝5回の村山千夏選手（埼玉県警）は初優勝が32歳、5回目の優勝が37歳だ。この大会結果からもわかるように剣道は若さやスピード、思い切りの良さで勝てる身体運動ではないということだ。技の成熟や相手の見極め、心のコントロールなど経験を積むことでしか体得できない要素が年齢では測れない剣道の特性である。しかし、大学生を焦点にした場合、4年生のみのチームが全日本学生大会で上位に進出していない結果を踏まえれば、課外活動という時間ではこの境地に辿り着くことは難しいとも考えられる。男女とも全日本剣道選手権大会で優勝している選手はほとんどが警察官だ。特練に選拔され剣道を中心に活動していることから剣道を行うことが仕事なのだ。一般的には週に5日、朝と昼の稽古に加え、筋力トレーニングや有酸素運動が日課である。このような活動を日々繰り返すことによって強固な「心技体」や、どのような試合の展開にも臆することなく対応できる力が付くともいえる。

限られた時間の中で、最大限の力を導き出す指導は、剣道の特殊性、年齢に伴う体力や筋力の低下、性別など多方面から見る視野の広さや知識、そして課題点を打破できるだけの努力が必要である。

7.2 健康の基本となる栄養、睡眠、運動

高校時の競技実績の有無に関わらず、運動選手として生活を送るためには、バランスの良い食事（栄養）、疲れをとり体の回復を促す睡眠や休息、選手としてある程度の高負荷となる運

動が基本となる。これは運動選手に限ったことではなく、一般的にも健康的な生活を送るために必要不可欠な要素ではあるが、高負荷の運動を繰り返す運動選手ならなおさら重要視しなければならない。運動選手は身体が資本であるため、上述した要素が一つでも疎かになっては怪我や病気につながる。大学にはそれぞれ専門領域の教員がいる場合が多いことから、たくさんの方々に協力を得て、専門的立場から剣道部に携わるサポートメンバーを増やしていくことが今後は求められる。

7.3 スポーツの視点からみたこれからの大学剣道の取り組み

7.2でも述べたように、これからは科学的データに基づいた稽古や練習方法を取り入れることも必要である。現在の剣道界は「稽古一筋」で他の運動種目と比較したときに遅れをとっていることは否めない。大学生の競技力に特化して考えた場合、稽古だけで現在の高い技術や瞬発的なスピード、激しいぶつかり合いに対応する筋力や体幹についていけるだろうか。高校女子剣道界で何度も優勝経験をもつ左沢高校（山形県）は早くから専門のトレーニングコーチに筋力アップのメニューを考案してもらい生徒に取り組ませてきた。阿蘇高校（熊本県、現阿蘇中央）は寮から高校までの往復7 kmを毎日ランニングすることで体力アップに努めてきた。このように稽古以外のトレーニングを取り入れることで結果を出している学校は多い。剣道の年齢的ピークといわれる時期は解明されていないが、身体的な特性を考慮した中で、現在の大学生の剣道技術を照らし合わせたとき、稽古のみでは継続的な結果が維持できるのかは疑問である。今後は効率の良い、稽古、筋力トレーニング、有酸素運動、ストレッチ、セルフマッサージ等のメニューを考案することが必要であり、今後指導者が目を向けていかなければならないマネジメントの要素である。

結び

今回の研究からみえた課題点は、今後、組織的な視野から剣道を分析し、有効な情報を取り入れていく視野の広さが大切であるということだ。これまで剣道はあまり科学的な部分を取り入れてこなかったが新しいものを作っていくことで発展できる要素は多々ある。剣道はスポーツではないが、大学生の競技力を考えた時にスポーツ的要素があることは否めない。今後剣道がスポーツではなく日本の伝統文化として継承していくためには、剣道の根幹ともいえる「心技体」を高める方法論の確立が急務といえる。そのためにはサポートメンバーを充実させ、それぞれの専門的立場から剣道の可能性を広げる意見交換や議論が活発に行われることである。

注

注1) 全日本剣道選手権大会

平成28年で第64回を迎え全日本剣道連盟会員規則に適合している男子の大会である。

趣旨は、普及振興を図るため、各都道府県剣道連盟登録会員の中から最も心技力に優れた選手により、天皇杯の獲得を目指し優勝を争い、広く剣道愛好者に披露すると共に剣道の真価を世に示し、一般の認識を深めようとするものである。

注2) 世界剣道選手権大会

第1回大会は1970年日本の東京で開催、それ以降3年に1度開催される。男女団体戦、男女個人戦が行われ平成27年第16回大会では日本開催となり56ヵ国と地域が参加した。

注3) 全日本女子学生剣道優勝大会

平成28年で35回を迎えた女子大学生大会団体戦において最高峰の大会となる。各地区の予選を通過し出場することができる大会である。

注4) 全日本学生剣道優勝大会

平成28年で64回を迎えた男子大学生大会団体戦において最高峰の大会となる。各地区の

予選を通過し出場することができる大会である。

注5) 剣道時代 スキージャーナル株式会社が毎月1回発行する剣道専門雑誌

注6) 剣道日本 (株) 体育とスポーツ出版社が毎月1回発行する剣道専門雑誌

注7) 新人データバンク 書籍「剣道日本」「剣道時代」が中学校、高等学校、大学などで活躍した選手を選抜し大会実績や進路について明記したもの

参考文献

- (1) 剣道日本 スキージャーナル株式会社
2000年12月号 78～79頁 2001 6月号 60～67頁 10月号 36～41頁 12月号 88～89頁
2002年6月号64～67頁 10月号 48～65頁 12月号 104～105頁
2003年6月号67～85頁 10月号 18～40頁 12月号 106～107頁
2004年6月号66～71頁 10月号 50～69頁 12月号 106～107頁
2005年6月号103～104頁 10月号 56～64頁
2006年1月号140～143頁 6月号94～98頁 10月号72～79頁 12月号144～145頁
2007年6月号110～115頁
2008年6月号90～96頁
2009年6月号94～99頁
2010年6月号98～101頁 12月号114頁
2011年10月号76～87頁 12月号94～96頁
2012年6月号95～99頁 10月号72～80頁 12月号P98頁
2013年6月号111～113頁 10月号88～104頁 12月号118～119頁
2014年6月号94～101頁
2015年1月号112～113頁 6月号80～89頁 10月号70～79頁

2017年2月66～73頁

- (2) 剣道時代 (株) 体育とスポーツ出版社
2007年10月号116～140頁 12月号108頁
2008年10月号69～88頁 12月号80～81頁
2009年10月号58～72頁 12月号80～81頁
2010年10月号98～107頁
2014年10月号100～109頁
(3) 剣道における女子大学生の競技力に関する研究 櫻井美子 神奈川大学国際経営論集 2016第51号97頁
(4) 神の心 剣の心 森島健男 体育とスポーツ出版社 22頁
(5) 全日本剣道連盟HP (<http://kendo.or.jp>)2016.10.2アクセス

参考資料

第64回全日本学生剣道優勝大会プログラム
第16回世界剣道選手権大会プログラム